「大河ドラマと兵庫の歴史」

園田女子学園大学名誉教授

田 辺 眞 人 先 生

今日（９月８日）は25年前土井たか子さんが日本で初めての社会党委員長になった日である。この間に女性の立場や能力が著しく向上したことは確かである。その反対に若い男性の力が枯渇している。まさに歴史とはそういうものである。私の第二の故郷ニュージランドでは多くの女性がリーダーとなっている。

さて去年は十二支について話をしたが難しかったとの声があった、そこで今回は「大河ドラマと兵庫の歴史」というテーマで話を進めていくことにしよう。【ＮＨＫ大河ドラマ『江』は、放映後かなりの反響があった。中には歴史に忠実でないという視聴者からの反論も多かったと聞いているが、しかしこのドラマは歴史ではなくあくまで歴史小説であることを忘れてはならない。小説家＝作家の物語と、事実に基づくドキュメンタリーと混同されては困るのである。歴史家にしてみれば別の見方のほうが面白い。

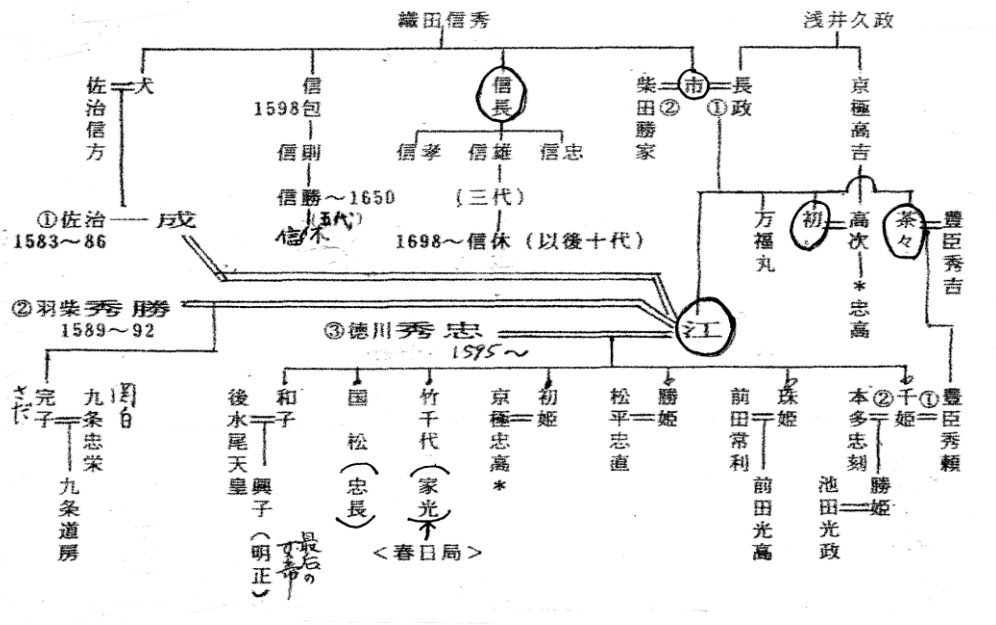
ところで来年の大河ドラマの主人公は「平の清盛」である。その神戸にもたらす商業利益は150億円と推定されている。高知の坂本龍馬の大河ドラマ関連では200億であった。額を控えたのは清盛の若い時代の話ゆえ晩年の清盛ほどの神戸との接点が弱いためである。今回は、神戸をあげて観光振興に励んで【ＫＯＢＥ de 清盛 ２０１２】を立ち上げた。（ちなみに『江』による商業利益は240億円あったと聞いた。）

さて本題に入ろう。今年の大河ドラマ『江』は滋賀県が主流ではあるが神戸も大いに関係する。戦国時代、今川義元を破った織田信長は愛知の稲葉山城を攻略したが一家を収めるまで、従って尾張から出た織田が濃美平野を手中に収めるまで７年を要した。その後14代将軍が空席であったので15代将軍に足利義明を据え、後見役となる。その間、武装集団の僧兵を鎮めたものの、依然岐阜に軸足を置いていたというのは背中の武田信玄が怖かったためである。後を徳川家康に任せたが案の定、武田勢は甲府から天竜川を渡り浜松から襲いかかった。しかし勢いに乗じて京に行く途中武田信玄は病死した。が、戦意の喪失を怖れ秘して進軍した。そのあたりのことは黒沢明の「影武者」でご存知かもしれないが。その後信長は足利義明を追放した。ここで室町幕府は滅亡したのである。次いで姉川の合戦で敗れた浅井長政は自刃、小谷城落城となるがこの時「江」は生まれる。織田信長の命によりお市の方と娘三人は信長の弟、信包（のぶかね）に引き取られた。次に長篠の合戦で武田勝頼を破り、翌年信長はやっと京に移ったのである。

こうなると、中部の毛利元就は警戒を始める。毛利は上手に味方を増やす方法をとり、この調略に乗ってしまった別所長治、荒木村重により、織田対毛利の戦いが兵庫県の摂津、播磨で始まった。播磨では三木合戦、神戸は花隈合戦、阪神では伊丹合戦となる。丹波の黒井城主、赤井直正（長政）は広大な勢力を持っていたが城主病死により黒井は滅亡する。

1580年明智光秀の家臣斉藤利三が黒井城に来たが1582年山科の合戦で敗退斬首され一方、江は吉の意向で佐治一成と政略結婚させられる。一成は14歳、江は10歳であった。しかし織田と秀吉の対立のため離縁をさせられ次に秀次の弟秀勝と再婚、これも一女をもうけたものの３年で秀勝は朝鮮出陣で戦死、はかないものであった。

江22歳の時16歳の徳川秀忠と再婚、２男５女を設けて添い遂げる。ここで右図の系図にあるようにすべての子供たちは孫娘に至るまで出世したといえる。竹千代と国松の男子は春日局の推す竹千代か、江のお気に入りの国松かと争ったが、結局家康が中に入り、竹千代（家光）が後を継ぐ、江は春日局には勝てなかったのである。家康の考えは跡継ぎでのちの闘争を懸念し長子の継承を確立するためと思われる。春日の局は将軍の乳人として大奥を取り仕切ることになる。春日局は黒井の近辺で春日という地名の出であり、その出生は先述の斉藤利三の娘である。現在も舞鶴若狭道の春日ＩＣを降りると興禅寺（斉藤屋敷）など歴史を感じるお寺が存在する。最後になるが、秀吉は死の床で江たちを養った織田信包を大名にして３万五千石の禄を与えたという。信包は柏原藩主となり以後十代に亘り織田家代々幕末まで子孫が守ってきた。福知山市柏原（かいばら）町には柏原藩陣屋跡や歴史資料館などがあり興味深い。(文責後藤)



昨年初冬に田辺先生とともに黒井、柏原への歴史ツアーが催された。毎回 100 人を超す盛況だと聞く。次の機会にぜひ参加したいものである。

田辺先生のラジオご出演番組

ＣＲＫラジオ関西　558KHz

おもしろ神戸・ひょうご学楽長　　毎月第２＋４日曜　よる 6:30～

街と暮らしとミュージック　パーソナリティ　毎週　日曜　あさ 8:15～

三上公也の情報アサイチ　コメンテーター　　毎週　木曜　＋　金曜　あさ 7:00～9:00